

雑誌	<i>Invest Ophthalmol Vis Sci 57 : 137-144, 2016.</i>
題目	Swept-source光干渉断層計による強度近視眼の視神経乳頭周囲形態の解析
著者	<p>浅井 智子¹⁾、生野 恭司¹⁾、秋葉 正博²⁾、木川 勉²⁾、白井 審一¹⁾、西田 幸二¹⁾</p> <p>(¹⁾ 大阪大学大学院医学系研究科眼科学教室、²⁾ 株式会社トプコン)</p>
要旨	<p>強度近視眼の視神経乳頭周囲の形態的特徴をswept-source光干渉断層計 (SS-OCT) を用いて解析することを目的として研究を行った。</p> <p>緑内障性視神経症を有さない等価球面屈折値$-6.0D$以下の強度近視114例114眼を対象とし、SS-OCT乳頭周囲サークルスキャン (直径$3.4mm$) を撮影し、網膜色素上皮 (RPE) 高を測定した。全周RPE高の平均と、全周を24区画に分けた各区画RPE高の差をPeripapillary Tilting Index (PTI) とした。OCTによる後部ぶどう腫高と中心窩・乳頭周囲脈絡膜厚 (ChT)、眼底カメラによる視神経乳頭周囲萎縮面積 (PPA) と従来の乳頭傾斜指標 (OI: 乳頭短径/長径比、θ: 垂線からの回旋角) のPTIとの関連を検討した。</p> <p>平均PTIは24区画間で有意差があり ($p < 0.0001$)、下耳側で最低値 ($-1930.8\mu m$) となった。PTIが最低値となる区画は77.2%の症例で下耳側にあり、PTI最低値とOI ($p < 0.0001$)、年齢 ($p < 0.001$)、PPA ($p < 0.05$)、中心窩 ($p < 0.0001$)・乳頭周囲 ($p < 0.0001$) ChT、後部ぶどう腫高 ($p < 0.0001$) が有意に相関した。</p> <p>強度近視眼の77.2%で乳頭周囲は下耳側に傾斜していた。高齢ほど傾斜は著明で、乳頭周囲傾斜と脈絡膜菲薄化、PPA拡大、および後部ぶどう腫高は有意に正の相関を示した。(日眼会誌 120: 707, 2016から転載)</p>